

Gayl D. Ness with Michael M. Low (eds.)

*Five Cities: Modelling Asian Urban Population-Environment Dynamics*

Oxford University Press, Singapore, 2000, xiv + 311 pp.

本書は、神戸アジア都市情報センター (AUICK) とミシガン大学人口・環境プロジェクトチームが、国連人口基金 (UNFPA) の支援を得て行った都市の人口動態と環境に関する研究の成果である。この研究の目的は、アジアの5都市を対象として、それぞれの都市の人口と環境に関する1970年から1995年にわたるデータを収集し、ダイナミックモデルを用いて2020年におけるその姿を予測することである。対象となった五つの都市は、ファイザラバード (パキスタン)、コンケン (タイ)、セブ (フィリピン)、釜山 (韓国)、そして神戸である。AUICK は人口増加から生じる都市問題の解決に向け、中規模都市における行政担当者間の情報交換の場として1989年に設立された。脚光を浴びがちなダッカやムンバイ等の大都市ではなく、この五つの中規模都市を調査対象とした理由は、AUICK の設立趣旨と無関係ではない。

第一部では序章に続き、2章で人口増加と都市化について歴史的な流れを概観し、3章では AUICK 設立の背景と趣旨、そして人口・環境相互作用のモデルについて説明が行われる。第二部では対象となる五つの都市のケース・スタディが提示される。そして最後の第三部で、五つの都市の比較と政策的な提言が述べられている。本書の中心を成すケース・スタディでは、各都市の地理的な背景から始まり、1970年から1995年の26年間にわたる人口 (人口、出生数、死亡数、移動数、世帯数、年齢構造)、社会施設 (病院数、医療従事者数、小学校・中学校数)、環境 (上水、下水、水質、住宅、大気汚染、燃料、交通、土地利用) 等のデータに基づき、25年後である2020年の生活の質を予測している。

大都市ではなく、中規模都市に焦点を当てたのはそれなりに意義があると思う。大都市はその人口規模の大きさとアクセスのしやすさから、国際社会からの注目を得やすい。中規模都市は目につにくいものの、都市人口に占める中規模都市の人口割合は大きく、その地域政策がより多くの人口に影響を与えることになるからである。

発展途上国において、中規模都市の人口・環境関連データを収集するのに、多くの困難を伴ったであろうことは想像に難くない。事実、釜山と神戸を除く残りの3都市については、なんらかの形でデータが不足している状況にある。例えば、ファイザラバードは、人口、医療施設、学生数、交通量などに関して2時点分のデータしかない。コンケンの場合、データは1975年から全ての年次にわたってそろっているが、登録ミスと思われる変動が大きく、その信頼性は低い。セブについては、データは収集されているが都市レベルのデータの入手には非常に困難が伴う。フィリピンは中央集権的傾向が強く、都市・地域レベルの情報は全てマニラに送られてしまう。セブのデータは、たとえ何年か後に入手できたとしても、より大きな地域単位にまとめられてしまっているため、中規模都市の計画策定には役立たない。また、人口関連データの中では、移動が地域人口変動に大きな影響を及ぼすにもかかわらず、移動に関してはデータを収集していない中規模都市が多い。

将来の人口推計、学校等の社会施設整備、交通量などの環境関係についての見通しは、社会経済計画を策定する上で不可欠である。しかしこれだけの不安定なデータを基に将来を予測して、果たしてどれだけの意味があるのか首をかしげざるを得なかった。むしろより精度の高いデータを一貫して収集する方法・制度を確立する方が先ではないだろうか。近年、途上国の都市問題に対処する上で、地方自治体による都市開発と管理に関する権限と能力の向上が急務とされている。編者の提言もこの流れに沿うものであり、本書は途上国における地方・中央政府の行政担当者など、実務者に参考になると思われる。

(千年よしみ)